

2024年3月末から1年間、在外研究の機会をいただき、英国ロンドン大学 SOAS (SOAS University of London School of Oriental and African Studies) の Japan Research Centre に在籍し、客員研究員として多くを学ばせていただいた。筆者は長期の海外滞在は2回目であるが、英語圏での生活は初めてであり、日本語教育の研究している身としては、英語の世界共通語としての圧倒的な力を感じた一年であった。日々様々なことが起こり、日本ではできない多くの経験をすることができたが、ここでは、SOAS で行った日本語学習環境に関する調査についての概要と SOAS と明治大学の学生とのオンライン交流会開催について、そして、研究に関わる出張先での学びについて述べたいと思う。

1. ロンドン大学 SOAS における日本語学習者に対する調査

今回、SOAS の School of Languages, Cultures and Linguistics の Dr Akiko Furukawa にご協力いただき、SOAS で日本語を履修している学習者に対して、日本語学習環境及び日本語接触機会についてのアンケート及びインタビュー調査を行った。

SOAS は研究倫理審査が厳しく、渡英前から研究計画及び倫理審査のための申請書、アンケートシート作成についてご指導をいただいていたが、渡英後1か月で学習者への本調査が開始されることになったため、生活の立ち上げとともに調査の準備が本格化し、非常に緊張感のある在外研究期間のスタートとなった。特に、年少者や障害を持つ人に対して調査を行う際の配慮が厳しく定められており、何度も Furukawa 氏と議論を重ねて準備を行った。研究協力同意書の作成についても多くの項目を確認しながら何度も書き直した。この経験は、質的研究方法を取り入れ始めた筆者にとっては学ぶことが多く、今後の研究活動のためにも非常に有意義であった。

研究協力者募集のため、日本留学前の学部1、2年生の授業見学をさせていただき、学生達と話すことができた。そして、調査協力者を得、アンケートの実施、個別インタビューの実施をすることができた。インタビューはアンケートの回答結果をもとにした半構造化インタビューを2024年5~6月に1回目、2025年1~2月にオンラインで2回目を実施した。一人につき1回45~60分程度行い、音声データを文字化したものを分析中である。インタビュー調査は、2025年夏に3回目を実施予定であり、それらすべてのデータがそろった上で、日本語学習者の日本留学後の日本語学習環境改善に寄与する研究としてまとめる予定である。

2. SOAS 日本語学習者と明治大学国内学生とのオンライン交流会実施

研究計画策定中に、Furukawa 氏からの提案で SOAS の日本語学習者と明治大学国内学生とのオンライン交流会「SOAS University of London × Meiji University Online Communication Meeting in Japanese 2024」を行うこととした。SOAS の学生が、日本語母語話者と日本語を使用する際の接触機会が非常に少なく、明治大学の学生との日本語による交流を希望されていたことから、下記の通りに計画し、計2回実施した。

<Session 1>

7月24日(水) 11AM-12PM (BST) / 7-8PM (JST)

テーマ「わたしの国に来たら、ぜひここへ行ってください！」

—有名な観光地、自分が好きな場所、オーバーツーリズムについて等

参加者数：9名 (SOAS 3名、明治 6名)

<Session 2>

8月28日(水) 11AM-12PM (BST) / 7-8PM (JST)

テーマ「役割語ってなんですか？」

－「役割語」とはなにか、日本語／英語の役割語について等

参加者数：9名 (SOAS 3名、明治 6名)

それぞれの回において、進行は筆者が行い、テーマに沿ったグループ会話を2セッション行った。テーマ以外にも、日本留学を控えている学生がほとんどであったことから日本留学や日本の生活についての自由質問の時間も設けた。会の実施に対する評価は概ね好評で、時間が短かったとの声もあったが、SOASの学生が来日した後に再会することを約束し、会を閉じた。実際に、SOASの学生が東京の大学に留学後、この時に交流した明治大学生と遊びに行った例も生まれ、短時間でもオンライン交流を複数回行うことで、継続した関係性が持てる可能性を示唆することができた。

本交流会実施報告については、明治大学商学部の「商学部の現場」へ掲載し、また、SOAS Japan Research CentreのAnnual Reportにも掲載予定である。

3. 出張報告

(1) ナポリ東洋大学 (イタリア) 訪問

2024年12月に訪問したナポリ東洋大学はヨーロッパにおける日本研究及び日本語教育で重要な位置を占めている大学である。今回Dr Roberta StrippoliとDr Giuseppe Giordanoの紹介・案内で同校を訪問し、日本語授業の見学、学習者との交流を通して、イタリアの日本研究及び日本語教育についての動向を知ることができた。Brexitの影響により、これまで英国への大学院留学が選択肢としてあったが、避けられるようになった例についても確認した。政治的判断が学術交流の形を変えることは非常に残念であり、「留学」の難しさについても考えさせられた。

(2) カーディフ大学 (英国) 訪問

2025年2月にウェールズのカーディフ大学を訪問した。ウェールズは現在も英語とウェールズ語の共存関係にあるため、外国語教育にも理解が深い地域であると聞いていたが、訪問直前に、現代言語学部の廃止案が発表されたため、高等教育機関での日本語教育の存続が危ぶまれる現実を知ることとなった。当初は、日本語学習者の学習環境と日本語母語話者との接触機会について話を伺う予定であったが、急遽、同大学での日本語教育の存続に向けて意見交換をすることとなった。今回の訪問により、生成AI等テクノロジーの発達が進む中でも、人間が母語以外の言語を学ぶことの意味について改めて考えさせられることとなったが、やはり外国語学習によって得られる文化的・社会的価値は計り知れないものであり、決して失われるべきではないという思いを強くした。

(3) Bletchley Park 訪問

2025年2月、第二次大戦時に英国政府の暗号解読学校が置かれたBletchley Parkを訪れた。ここでは当時、主にナチス等の暗号解読を行っていたが、現在は暗号解読などをテーマとした博物館になっている。日本語の暗号解読、及び戦争のための日本語学習に関する資料も展示されていた。手書きの漢字フラッシュカードは戦争に関する文字が多く、また、辞書と共にあった「原子爆弾」と鉛筆で書かれたメモの展示には衝撃を受けた。日本の暗号解読のためにSOASへの超短期間で行う日本語教育の要請があったことを始め、イギリスにおいても戦争のために

言語教育が利用されていた事実を目の当たりにし、改めて平和的な言語学習を望む思いを強くする機会となった。

(4) 日本文化紹介イベント等への訪問

その他、日本文化紹介の場を訪問することにより、文化コンテンツに触れるための日本語の実態についての観察をした。

ロンドンにある「Japan House」は日本外務省の海外拠点事業の一つで、日本への深い理解と共感を広げるための常設展示場である。専門のデザイナーが美しく伝統工芸品などを展示した館内はさながら美術館のようであり、日本の新たな魅力を伝える場として素晴らしかった。展示の紹介は英語で記載されていたが、地名などが日本語のまま使用されているものもあった。

2024年7月に、英国最大の日本文化総合博覧会「Hyper Japan」へ行った。アニメやマンガ、食など、日本の「今」を伝える一大イベントである。広い会場で特に目を引いたのは、コスプレをした多くの若者が嬉しそうにアニメやマンガなどのブースを巡っている様子であった。何人かに声をかけ、話を聞いたが、日本文化は大好きだが日本語を勉強したことはないという人がほとんどであった。そして、会場には日本語の文字はほとんどなく英語一色であった。

2025年2月には、「London Anime & Gaming Convention」へ行った。これは日本のアニメ、ゲームの愛好家が集まるイベントだが、家族連れが多く参加していたことに驚いた。やはり、コスプレをしている人が多くいたが、家族で「鬼滅の刃」のキャラクターになっていたり、子ども達が「悟空」になっていたりした。ここでも日本語を勉強しているという人には会えなかったが、勉強してみたいと言った子どもはいた。そして、この会場でも日本語の文字はほぼ見なかった。

これらの会場を訪れることにより、日本語を勉強しなくとも英語だけで日本文化へのアクセスが可能であり、また「デザイン」としてさえも日本語の文字が使われていない事実に接することができた。衝撃を受けるとともに日本語学習のあり方について考えさせられることとなった。

4. 別課題の研究活動成果

2023年度に本学において実施した国際共修授業について、その課題を明らかにして今後のより良い授業に繋げるため、在外研究期間中に研究としてまとめた。授業実施中に行ったアンケート調査及び授業実施記録に加え、2024年5-6月にオンラインで受講生に対して行ったインタビューもデータとした。その成果は、2025年の国際学会及び日本国内学会の発表に採択され、論文の執筆、投稿も行った。研究の時間が十分とれたことで、新たな研究方法を学び、その方法を取り入れることもでき、今後の研究活動を進める上でも大変有意義な時間となった。

5. 今後の展望と教育への効果

日本語学習環境の調査については、今後も継続してデータを集め、2026年度以降に国際学会及び論文として発表予定である。この成果は、海外高等教育機関での留学前教育のサポート及び受け入れ機関における日本語教育コース策定、サポート方法に対して意義ある結果になると考える。

今回、協定校の日本語教育の現場及び学習者と接することができたため、改めて留学生受け入れの課題が見えてきた。特にSOASはYear Abroad中の日本語学習を重視しているのだが、本当の日本語力には教室での日本語学習だけでなく、それを生かした日本語での活動を充実させ

ることも重要だ。そのためには、留学生個人の努力だけに頼らず、受け入れ機関が日本語での交流をしながら学べる環境を準備しておくことが重要ではないかと感じた。これは日本語母語話者を含む国内学生の協力が必要であろう。留学生が満足する環境を準備することは国内学生が学内で国際経験を積む環境を作り出すことと直結するため、単なる留学生教育のためではない、学内でのダイバーシティを作り出す重要な要素となり得ると考える。今後は、そのような視点を持って、学内での留学生教育及びキャンパスの国際化につながる授業を行っていきたい。